

## Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画

## talk baton 12 活動報告

## talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

## U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などぎっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



12回目となるトークバトンは大学院まで建築設計を学んだ後、大工の道へと進んだ異色の経歴を持つ船橋氏。自らが設計ー請負ー施工と全ての工程を一人で行った「堺のS邸」を案内頂き、自身の建築へのスタンスやこれからの抱負について語って頂いた。

## ■建築との関わり方

**船橋** まずは略歴から紹介します。1982年大阪で生まれて、大阪市立大学大学院を卒業しました。大学では建築史を専攻していました。卒業後は現場で大工として携わろうと思い、2007年から東京の工務店に6年間従事しました。そこでの仕事の内容は主に木工事（大工仕事）でしたが、その他に設計や施工管理、見積もり作成等、多様な業務を行わせて頂き、学びました。そして2013年に独立し、2014年に大阪に戻り、本格的に工務店業務を開始しました。

今回のtalk batonを機に独立してからの仕事をまとめ、それぞれのプロジェクトに対して自分の役割を分析してみました。一般的な建築業務においては大工は木工事、設計者は設計業務とそれぞれの役割が決まっていることがほとんどだと思いますが、自分の建築への関わり方には幾つかバリエーションがあります。下記のようなパターンで考えます。

## A. 建築主ー設計ー施工管理（大工）

Aは施工管理の下請として木工事を請け負うパターンです。通常、大工はこのような仕事の請け方をしたいと思います。

## B. 建築主ー大工（設計、施工管理）

Bは大工（自分）がまず仕事を請けて設計と施工管理まで行うパターンです。最近の仕事の中では、このBパターンが増えてきました。

## C. 建築主（設計）ー大工（施工管理）

Cは建築主自体が設計者であり、大工兼施工管理として仕事を請けるパターンです。これまでの仕事の中ではこのパターンが特に多いです。

## D. セルフビルド

最後に全てを自分で行うパターン。船橋工務店の事務所はこのパターンで作っています。

このように自分の仕事をパターン別に分類してみるとB、Cがとても多いことがわかりました。基本的には全ての仕事で大工として現場に入っています。自分の仕事への関わり方としては、下請として大工仕事だけをこなすものは少なく、これからB、Cのパターンが重要になってくると考えています。また最近では、新築や大きめのリフォーム工事においても、設計から携わることができるようプロジェクトを受注するようになってきました。以上のように受身ではなく主体的に建築に関わりたいと考えています。

## ■「堺のS邸」

**船橋** 今回見ていただく建物は、大阪府堺市に建つ戦前の木造住宅であり、築80年ほどの古民家の改修です。これまで何度か改修が繰り返されています。母屋、下屋、離れ、中庭、駐車場等で構成され、母屋は田の字型プランの典型的な民家形式の住宅です。施主は現在夫婦二人で暮らされているS氏。普段は2人で暮らされていますが、連休となると、息子さん家族と娘さん家族が帰ってくることが多く、一時的に10人以上が集まることがあります。改修前には、各々の間がそれぞれ雑壁などで仕切られており、大人数の時でも8畳の間か二間に集まるような使い方をした。今回のプランでは、それぞれ仕切られていた間をつなげ、キッチン・ダイニングを中心に置くことにしました。これは施主の息



船橋氏によるレクチャーの様子



改修前の「堺のS邸」



施主である（お母さん）と当時を振り返る

## Member's Forum

会員投稿の頁

子さんの要望でもありました。各々の間は、床・壁・天井など意匠もバラバラだったので、統一しました。また母屋の玄関は、門をくぐった南側に位置していますが、そこは普段はほとんど使用せず、駐車場と併設している北側の勝手口を玄関代わりに使用していました。そのため今回の改修では、勝手口の位置を移動し、大きさも広くし、使いやすくしました。

母屋の向かいに、Sさんのお母さんが住まわれている離れがあるため、工事は施主お二人ともが住みながら進めることができました。打合せ時から、施主のSさん（お母さん）とプランの検討をよく重ねていましたので、それは現場の工事が始まってからも続くことになりました。

#### ■大工として、設計者として毎日現場に行く

**船橋** 今回は設計から受注するBパターンです。設計段階では設計者としてお話を伺い、模型を作るなどして設計を進めました。プラン決定後に見積もりを行い、工事契約をし、工事を開始しました。見積もりの段階では詳細をあまり決めないようにしています。大まかな仕様と建具の数・位置、仕上げの数量など、設計段階で確定できる条件によって金額を決めて、そのまま工事に取り掛かります。なぜなら改修工事は、解体してみないと分からない部分が多くあるからです。

さて、工事が始まる私は大工として現場に行きます。だいたい午前8時から午後6時まで毎日大工仕事をします。と同時に、設計者の立場として毎日現場に行くことにもなります。作業は午前10時と午後3時に休憩を入れるのですが、この時間帯に打合せをしたりします。朝8時から打合せを始めたかもしれません。それを週に一回か二回程度行います。「今日はここを考えたいんですけど」と言って一緒に考えて方針を決めていきます。方針を決めてから、その場で設計し、その日のうちにスケッチを見せたり、言葉で説明したりして、確認の後、必要な材料を発注したり、そのまま進めて作ったりします。昔で言うところの、旦那場のような状態で3ヶ月

程度やっていました。通常の建築業務においては、途中での変更は、確認作業や、図面作成や現場指示など労力のかかるところですが、上のような進め方は、比較的効率は落ちていないかと思います。最初から詳細まで決めていないので、現場にて詳細を詰める作業を、その場で見て考えながら決めて進めるといった方針です。当初の見積もりに対する増減に関しても、説明を加え、開示しながら工事を進めます。

現場ではこんなやりとりがありました。キッチンから勝手口が窺えるようにするために、小さな窓をつける計画がありました（これも解体状況により初期想定から変更されている）。私は窓を入れる想定だったのですが、Sさんは窓（ガラス）は要らないと仰る。すると現場（下地の段階）でSさんは、勝手口から訪問したお客さんを想定して、おしゃべりをするシミュレーションを始めます。結果的に、さっと声を聞いたり、手を振ったりしたときに、ガラスが邪魔ということになり、取りやめとなりました。また他には、すでに増築されていた下屋と母屋との柱が並んで立っている部分があります。当初は並列した柱を板で巻き、隠すことを考えていましたが、いざ巻こうと試みると家のスケールに合わなく違和感を感じたため、我々大工二人、施主お二人、全員でこれはないかと一致し、取りやめました。その後「ではどうしようか」とさらに議論が始まります。東京にいる息子さんもLINE会議で参加します。このように毎日現場に行き、大工仕事をしながら、ここをどうしよう、あそこはどうしようとかSさん夫妻と相談しながら進めてきました。

**S氏（お母さん）** 全てにおいて船橋さんとああでもない、こうでもないと進めてきました。上からの壁の位置や高さ、色の塗り分けの場所などもここで話しながら決めたものなので、だいたい把握しています。この家は私の祖父がつくり、父によって増改築が行われ代々住み続けてきた古い家です。私たちの思いを聞いて頂き、一緒に考え、作ってもらったので大変満足しています。

**船橋** Sさん（お母さん）には、体を使ったジェスチャーや分かりやすい言葉で具体的に使い方を示して頂いたので、私も想像力が働き大変刺激になりました。設計を一時に集中してやるのもひとつの建築の方法だと思いますが、私は、まずどういう立場で現場にたいして向き合うか、自分がどのように建築に携われるかを考えて仕事をしています。

#### ■理想の建築

**質問** 設計に対するスタンスを教えてください。

**船橋** 最近設計から携わらせて頂くようになり、設計について考えることが多くなりました。実際、設計をすると細かいところで後悔することもあります。これまでしっかりと設計を教わったことがないので、確固とした考え方やスタンスは特にありません。しかし、旦那場とか設計士兼大工という関わり方で施主の方と一つずつ答えを出す方法は続けたいと考えています。

好きな建築を挙げるとすれば桂離宮です。卒業論文で桂離宮を取り上げました。桂離宮はいわゆる設計者という立場の人物が明確ではなく、施主（使用者）である智仁親王が造営したとされています。設計のアイデアは智仁が出し、それを大工が形を作り、答えていく。当時の数寄屋建築と同様、そのような方法がとられていたと考えられています。（分析で言うパターンCの状態です。）その後、智仁の子である智忠親王が引き継いで、増改築や、庭の整備が繰り返され、ほぼ現在の形になったとされています。結果として、当時でも特異なプロポジションとなり、他に類を見ない素晴らしい建築となっています。この桂離宮のように、その時々に必要な要求が積み重ねられて作られた、特定の人間や思想から解放されたような、誰が考えたのかかわからないような建築、なおかつ洗練された全体性を持った建築、そんな建築に携われればと考えています。

#### talk baton 12 を終えて

施工途中の現場にお客さんと一緒に立って同じ目線で物事を決めていく船橋氏。自分で全てをコントロールすることができて初めてできる正真正銘の「技術」。使う人が愛着を持ち、本当に良いものだけを純粋に目指すスタンスは僕たち設計者にとってすごく刺激になる一日でした。

対 談 日：2017.08.05  
場 所：シマノ財団会議室・S邸  
（堺市堺区・堺市西区）  
モデレーター：森下 大右（昭和設計）



現場で議論して決めた増築部の柱と母屋の柱の取り合い



「堺のS邸」での記念撮影